

『静かな生活』

大江健三郎 著（講談社）

中村 弓子

大江氏のこの新作は、この欄ですでにご紹介した『新しき人よ目ざめよ』、『人生の親戚』に連なる、氏の実生活に根ざした一種の「家庭小説」である。しかしなんという「家庭小説」だろう！それは、大江氏という船長の壮大な思想的問いかけを発信しつつ、障害児イーヨーというどこに通じているかもわからぬとてつもないアンテナを載せて、時間と空間の果てしない拡がりを浮遊する

宇宙船の物語であり、「形而上学的家庭小説」とでも呼ぶべきものである。

今回はこの宇宙船的家庭が、その乗組員の一人である氏のお嬢さんの視点から描かれるのだが、他ならぬ船長の大江氏自身がいま、生涯に何度という「ピンチ」にあり、小説はその「ピンチ」の物語となっている。

「ピンチ」の発端は、大江氏が実際にテレビで

行った「信仰を持たぬ者の祈り」と題する講演である。私自身もこれをテレビで見たが、幼年時代からすでに始まっていた信仰に対する関心と距離感の共存、そして障害児イーヨーの誕生が機会となった人間の「いのち」と世界の運命に対するやむにやまれぬ祈りについて語ったものであり、そこに吐露されているものの清冽な美しさが深い感動となつて残る講演であつた。

この講演はまた、ふと私にチャップリンの晩年の傑作『ライム・ライト』の忘れ難い一場面をも思い出させた。しがたない老ピエロのチャップリンは、自分の才能に失望し生活にも行きづまって自殺未遂をした若いバレリーナを救い、心の病ゆえに動かなくなった足をも動かすことができるまでに回復させる。しかし、いよいよバレリーナとしてデビューという日、出番の前にして彼女は再び「足が動かない」と言う。彼女を平手打ちして舞台につき出したあと、老ピエロは腕ぎ手を合わせ

て祈る。「神さま、あなたがいるのかいないのか私にはわかりませんが、どうかあの子を救ってやって下さい」と。

「自分のことを信仰のない者だとわざわざいいだす必要はないし、しかもそういっておいて祈りのことに言及しもしするのは、誰に対してというのでもないけれど、確かに失礼なのじゃないか、とは思ふ。そういうことをしてしまつた以上、父にはいくらかの軽い罰があたえられても仕方がないはずだ」と、お嬢さんの口を通して「ピンチ」の由来がいくらか自嘲気味に語られてもいるのだが、大江氏の内的状態はたしかに、あの老ピエロの祈りに似たひたぶるな純粹さを持つと同時に、人間の尊厳に対するヒューマニズム的立場と、超越者に対する祈りととの間に引き裂かれている。この状態そのものがすでに本質的「ピンチ」なのである。

しかも、まるで悪いことは重なる、という具合

に、この「ピンチ」に加えるに、大江氏が幼年時代からひきずってきている二つの宿業ともいうべきもの（小説の中では、「積年の諸悪」とこれ又いささか自嘲気味な呼ばれ方をしているが）の意識が氏を襲う。それは「死の恐怖」の意識であり、「過大なエゴ」の意識である。「僕が子供の頃から恐しく感じていた、死とその後についての問題」、「来世がありさえすれば、そこが天国でも地獄でもいい、その両方ともまったくの虚無ほどには恐しくない」と言うほどの虚無に対する抑え難い恐怖。そして、「お前が頭の良い子だとチャホヤされるうちに、誰かおまえよりほかの人間で、その人自身の命よりおまえの命が価値があると、そのように考えてくれる者が出てくるなどと、思ってはならない。それは人間のもっとも悪い墮落だ」と父親に言われていたその予言が大人になって当たっていると感じる恥辱。

しかし、この「ピンチ」の物語にも脱出口が

いま見えている。それはソ連のタルコフスキー監督の映画『案内人』^{ベニカ}に登場する、世界を救う子なのかそれとも呪われた子なのかわからない女の子のエピソード、エンデの童話『モモ』の全世界を救う少女の物語をへて、『新しき人よめざめよ』でも取り上げられたブレイクの予言詩『ジェルサレム』に再び連なる脈絡に見出されるものである。それは『ジェルサレム』の次の一節に要約される。「イエスは答えられた、惧れるな、アルビオンよ、私が死ななければお前は生きることができない。／しかし私が死ねば、私が再生する時はお前とともにある。／これが友情であり同胞愛である。それなしでは人間はない。／そのようにイエスが話された時／暗闇のなかを守護天使がちかづいて／かれらに影を投げかけた、そしてイエスはいった。このように永遠のなかでも人はふるまうのだ／ひとりは他の者がすべての罪から解きはなたれるように、許しによって。」それは無辜な

る者による救いと再生の同時的成就であり、換言するならば、キリストによる復活を信じることが出来るか、という問題にはかならない。

お嬢さんの視点を通して見てさえも、宇宙船大江号の生活は、表題のような『静かな生活』どころか、その船長である大江氏の内面にある深い動揺の気配を感じずにはいられない。それはまぎれもなくバスカルの言う「呻きながら求める人」のひとりである大江氏の「魂の闘い」の気配である。ランボーが「魂の闘いは戦場の闘いほどにむごたらしい」と言ったその「魂の闘い」の気配である。

しかし、それはあの聖アウグスチヌスが、人祖アダムとエヴァの原罪を、それが究極的には救い主の愛による贖罪をもたらす契機となったがゆえに「^{フエリックス・クルバ}幸いなる罪過」と呼んだように、究極的には「幸いなる闘い」なのではないだろうか。氏の「ピンチ」は「幸いなるピンチ」なのではないだ

ろうか。

そして、この点を含めて宇宙船大江号の命運そのものについて、この本のイーヨーの次の言葉は、いつものように飄々としたなかに本質的予言を含んでいるのではないだろうか。

「私はずっと楽観していました！」

（お茶の水女子大学）

